# ヴァレンタインデイ

Ｐ琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヴァレンタインデイ

【Ｎコード】
Ｎ９１４０Ｑ

【作者名】
Ｐ琢磨

【あらすじ】
「これはお礼なの」そう言われて渡されたチョコ。僕はそれが何を意味するのか分からなくて……。

ヴァレンタインデイ。女の子が男の子に淡い想いと共にチョコを渡す、特別な日。

僕はその日も変わる事の無い日常を謳歌した。いつもの時間に起きて、いつもの朝食を胃袋に落として、いつもの制服に袖を通して、いつもの時間に家を出て、いつもの道順で学校へ向かった。

二年五組の教室はやっぱり浮ついていたけど、その空気に当てられないように気を配りながら、窓際の一番前の自席に向かう。日当たりが良くて、壁際に暖房機が据えつけられているために、とても温かい。欠伸を1つ浮かべて鞄の中から教科書やノート、それから筆箱を机の中へ仕舞う作業を始める。

「砂宮くん」

不意に声を掛けられ、僕は脊髄反射で「ん？」と声を漏らしながら机から視線を上げて、机の前に立つ女生徒を見つけた。

色素の薄い、茶色がかった髪は房が胸の前に垂れている。太い眉に、二重の瞼。凛とした瞳に、スッキリとした口許。身長は１６０ｃｍくらいかな。可愛らしい女生徒の胸元にあるネームプレートには【楽堂】とある。

簡潔に言えば、知らない生徒だった。

楽堂さんは僕を正視して、徐（おもむろ）にスカートのポケットからチロルチョコを取り出した。僕はポカン、としたままそれを眺めている事しか出来なかった。

「これ、あげる」と言って、チロルチョコを机の上に置く楽堂さん。

「……え？　あ、うん。ありがとう」よく分からないままにお礼を言ってた。

……どういう事だろう？　チョコを受け取るような覚えは無いのだけど……と思いながらチロルチョコに手を伸ばそうとして、やんわりとその手を握られた。細く、冷たい指が絡んでくる。

「っ？」思わず体が震えるほどに驚いてしまう。
視線を上げると、やっぱり楽堂さんが僕の手を握っていた。その表情は何と言うか……不思議そうと言うか、手を握り締めたままマジマジと僕を見つめている。まるで視線で穴が空くんじゃないかと思うほどに凝視されて、僕は戸惑いながらも「な、なに？」と声を出した。
「これは、お礼なの」
楽堂さんの口から出た言葉に、僕は数瞬置いてけぼりを喰らった。何を言われたのか中々理解が現実に追いついてこなくて、眉根を顰めて困惑するばかり。
「……えっと、どういう事？」意味が分からないと観念して尋ねる。
楽堂さんは僕の手を握り締めたまま、何やら嬉しげに顔を綻ばせた。悪戯を始めようとする悪童のような顔だ、と思った。
「助けてほしいの」
そう言うと、彼女は僕の手を離して、小さく前のめりになって囁（ささや）いた。
「――放課後、下駄箱で」

◇――◇――◇

こんな事は初めてだった。楽堂さんは朝のホームルームが始まる前に教室を後にし、僕はクラスメイトの噂の肴（さかな）にされてしまった。告白されたのか？　――とか、付き合うのか？　――とか、今の誰なんだ？　――とか。こっちが聞きたいよ、と言いたくて仕方なかった。
授業中も楽堂さんの顔ばかりが脳裏にちらついて、とてもじゃないけど集中できなかった。遂に僕にも春が来たのかなぁ、と思ったりしたけど、今朝の彼女の一言がどうしても引っかかる。
――助けてほしいの。

そんな事を言われたのも勿論、生まれて初めての経験だ。
ストーカーにでも付き纏われているのだろうか？　……僕にはストーカーを退治できるほどの腕力は無いし、追い払うだけの知力も有してない。それともアレだろうか、彼氏の役をやってほしいとか云々。何で僕なんかを選ぶのかとも思ったけれど、たまたま偶然、僕になったのかも知れない。運命の神様の仕業だとしたらそれはもう受け入れるしかあるまい。
それとも近々ある期末テストの勉強を教えてほしいとか、そういう事だろうか？　……生憎と僕はテストでは平均点が取れるか否かの瀬戸際の頭脳の持ち主。それともそんな僕に教わらないといけないくらいに致命的な頭の悪さなのだろうか？　……と言ったら失礼かも知れないケド。
単に何かの人数合わせなのかも知れない……と色々考えている内に、放課後になっていた。今日ほど身の入らなかった日は無かったと思う。ノートも新品同様に真っ白けだ。
机の中身を鞄に入れ替えて、席を発つ。クラスメイトからの冷やかしと別れの挨拶を背に、僕は下駄箱に向かった。胸の高鳴りは帰りのホームルームが始まる前からだったけれど、それが一段と大きくなってる。これからどんな出来事が待ち受けているのか。期待に胸を膨らませて下駄箱がある一階へと、階段を二段飛ばしで下りていく。
「遅い」
果たして下駄箱には楽堂さんが仁王立ちで待ち構えていた。僕は思わず胸の高鳴りが一瞬停止してしまうほどに驚いて、それから「ご、ごめん」と情けなく謝した。
「ふふっ、謝らなくていいよ。私も今、来たところだから」
楽堂さんはそう言ってトントン、と革靴の爪先を鳴らした。右手に提げた鞄を左手に持ち替えて、ふわり、と外に振り返った。「行こっ？」

「う、うん」僕は慌てて下駄箱まで走って靴を取り出す。上履きをぞんざいに放り込むと、蹌踉(よろめ)きながら靴を履いて楽堂さんの後を追った。

「チョコ」

楽堂さんの隣まで駆けて来て間も無く、彼女が小さく声を発した。僕は一瞬何を言われたのか分からなくて、すぐに言葉を返せなかった。

「チョコ」再び同じ文言を唱えると、楽堂さんはチラ、と僕を一瞥(いちべつ)した。「食べた？」

「え、――あ」ようやくそれが今朝のチロルチョコの事だと思い至り、僕はズボンのポケットの中にしまい込んでいたそれを取り出そうとして、「――まだ、食べてないよ」と言葉を返すだけに留めた。

「……融けてない？」キョトン、とした表情をする楽堂さん。

「うん」僕は頷いた。「融けてないよ」

「そっか」楽堂さんの顔に笑顔が戻った。「でも、どうしてすぐに食べなかったの？」それから不思議そうな表情に彩られた。

答えをすぐに返そうとして、ちょっとまごついた。「初めて、貰ったから、かな」

楽堂さんに貰うまでは、学校で貰った事が無い。だからこそ、これは特別なチョコだった。すぐに食べるのは勿体無いと感じたんだ。

楽堂さんは「ふぅん」と気の無い返事をくれた後、前を向いて横断歩道の前で立ち止まった。

僕も倣うようにして立ち止まる。その時、そっと覗き見るように、楽堂さんを見つめた。

……僕にはトンと縁の無さそうな、可愛らしい女の子だ。彼氏がいたって不思議じゃない。そんな娘が、どうして僕なんかに声を掛けたんだろう？

楚々とした雰囲気を醸し出す彼女は、僕の視線に気づいたのだろう。ふわ、と笑みを飾ると「なに？」と小さな口で囀(さえず)った。

「いや、うん、何でもない」

何でもない事なのに、一つ一つの挙措が愛しく感じられてしまう。絶対に今の僕は、惑わされてる。篭絡されているも同然の状態だ。

――そこでふと、僕は気づいた。

「えと、僕達、今どこに向かってるの？」と、気づいた疑念を言の葉に載せた。

楽堂さんはまたも不思議そうな顔をして、それからポンと手を打った。

「そう言えば言ってなかったっけ。――私んちだよ」

◇――◇――◇

勿論、同年代の女の子のお家にお邪魔するなんてのも初めての経験だ。

住宅街にある、普通の一軒家。特別裕福そうでもなければ、貧しそうな訳でもない。車庫には軽自動車が一台駐車していて、もう一台分の余裕がある。玄関まで短い階段を上ると、彼女は鞄の中から鍵を取り出した。

「ただいまー」

と家の奥へ声を飛ばしながら、楽堂さんは革靴を脱いで廊下をスタスタと進んで行く。僕はと言えば未だに状況が掴めず、置いてけぼりな感覚に身を浸したまま、玄関口で固まっていた。

入ってもいいのかな？　――いや、ここまで来て帰るという選択肢はあるまい。僕は意を決して、「お、お邪魔しますっ」と上擦った気息を吐きながら靴を脱いで彼女の後を追った。

他人の家の、独特の匂いが鼻腔を衝く。嗅いだ事があるような気はするけど、記憶にある何れとも違う臭気。木や畳の匂いが、ちょっと濃い気がする。

廊下を奥へ進むと、突き当たりで扉にぶつかった。扉に掛けられている札には、【ＲＩＭＩ　ＲＯＯＭ】と記されている。その扉を何の躊躇いも無く開け放つと、楽堂さんは中へ入って行き、「さ、

入って入って」と僕を手招きした。
「お、お邪魔します……」玄関口でも言った口上を再び口にしながら、僕は扉を潜った。
一言で言えば小さな部屋だった。四畳はあるまい。その中にテレビ、ベッド、クローゼット、本棚、机があるのだから、人が入るスペースなど在ってないようなもんだった。
楽堂さんがテレビデッキの中をゴソゴソ漁っている間、僕は手持ち無沙汰に部屋の中を見回していた。
本棚にあるのはよく見ると少女コミックスじゃなくて少年コミックスばかりだった。下の段にはゲームの攻略本がズラリと並んでいる。机の上にはゲームソフトのパッケージが乱雑に積み上げられ、いつ崩落が起こるとも知れない状態になっていた。机の隣の壁にはちょっと古いゲームのポスターが貼られている。
「さぁ、砂宮くんの出番だよ」
ポン、と膝を叩かれて振り返ると、ベッドに腰掛けた楽堂さんが、ゲーム機のコントローラーを手にテレビ画面を指差している。１４インチのモニターには、去年くらいに発売されたゲームの画面が表示されていた。
「……え？」意味が掴めないままにコントローラーを手渡されて、僕は戸惑いを隠せないまま棒立ちになってしまう。
「あれ、言ってなかったっけ？」逆にキョトンとする楽堂さん。「これ、難しいから助けてほしいの」
画面に映ってるのは、２Ｄのアクションゲーム。プレイヤーキャラクターは二人。よく見ると楽堂さんの手にもコントローラーが握られている。その顔には急かすような色合いが滲んでいた。
……ようやくここに来て、彼女が何の助けを求めてきたのか察した。
「砂宮くんって、ゲーム上手いんでしょ？」
確認するように問われ、僕は座る場所を探しながら、「うん、まぁ、そこそこ」と曖昧に返答して、「あの、どこに座ればいいかな

？」と伺いを立てた。
「ん？　ベッドでいいよ」と言いながらポンポン、と自分の隣を示す楽堂さん。
　気恥ずかしさを感じながらも、僕は断る事も出来ずに楽堂さんの隣に腰掛ける。楽堂さんは赤い帽子の配管工、僕は緑の帽子の配管工を使って、ゲームを始めた。
「これ、皆は簡単だって言うけど、絶対に難しいと思うの」
　言いながらコントローラーをカチャカチャ言わせてモニターに映る赤い配管工を操作する楽堂さん。確かに、プレイヤーキャラクターの動きはどこかぎこちないと言うか、ゲーム初心者のような動きに見えた。
「あっ、ほら死んだ！」赤い配管工が谷の底に落ちたのを見て大声を張り上げる楽堂さん。「早く助けて助けて！」僕に向かって肩をぶつけてくる。思わぬ挙動にコントローラーを落としかけた。
「分かったから落ち着いて！」言いながら赤い配管工が入っているシャボン玉に触れ、楽堂さんのプレイヤーを助ける。
　楽堂さんは「助かったー。もー、こんなの絶対に一人じゃクリアできないよー」ブツブツと言いながら、またぎこちない動きで赤い配管工は谷へとまっしぐら。「あーっ！　また死んだーっ！」
　再びシャボン玉の中に入って浮かんでくる赤い配管工を助けながら、何だか懐かしい感覚に囚われた。自分がゲーム初心者だった頃も、こんな感じじゃなかったかな、と。
「うん、やっぱり砂宮くんはゲーム上手いね」
　何度と無くシャボン玉のお世話になりつつも、赤と緑の配管工はステージを少しずつクリアしていく。楽堂さんは僕のプレイを見て納得しているのか、うんうんと頷いている。
「ちょっと慣れてるだけだよ」照れ隠しに頬を軽く掻く。「――でも、どうして僕だったの？」
　僕はここに至るまでずっと疑問だった事を口にした。クラスには僕よりゲームが上手い人だっているだろうし、楽堂さんのクラスに

だって少なからずいるだろう。わざわざ別の教室にいる男子を誘うほどじゃない。それにゲームをするんだったら、もっと仲が良い友達だっている筈だ。

そう思っての発言だったのだけれど、楽堂さんは「ん～」と悩ましげに声を落として、暫し沈黙をくれた。

「もう憶えてないかな～」と言って、楽堂さんは口を開いた。「小学二年生の時、私達同じクラスだったんだよ」

――え、と記憶を手繰り寄せようとしたけれど、思い出せない。その時分の記憶と言えば、友達と色んなゲームをしていた事しかない。今よりずっと不真面目で、今よりずっと毎日が充実していた頃だ。

「砂宮くんって、どんなゲームも上手かったよね」懐かしむように瞳を眇(すが)める楽堂さん。「何か、あの頃の砂宮くんってカッコよく映ってたんだよ、女子の中ではね」

初耳だった。確かにその頃は男子女子の垣根を超えてゲームをしたり、お喋りに興じていた気がするけど……でも、モテていた、と言う記憶は無かった。精々で“仲が良かった”と思える程度だ。

「三年になる前に、私転校したの」ふぅ、と小さな吐息を落とす楽堂さん。「それで、今年の三学期からコッチに転校してきたんだー」

それだけ告げると、ふとその愛らしい顔を僕に向けてきた。僕は訳も無くドギマギしてしまう。

「砂宮くんって、昼休みの時間、三階の美術室の前で、こっそりゲームしてるでしょ？」

ドキッとした。三階の美術室の前の廊下は、基本的に誰も来ない。学校の隅に当たる場所で、尚且つ美術道具が乱雑に放置されているから物陰が多い。僕はそこで携帯機を持ってこっそりゲームしている。勿論、先生に見つかったら没収は免れまい。

「偶然見つけちゃったの。そしたら何だか懐かしくなっちゃって。あぁ、砂宮くんは昔と変わってないんだなー、って」

……確かに、小学二年生の頃も学校でゲームをしていたような気

がする。僕がプレイするのを、男子女子関係なく観戦して、ワイワイ騒ぎ合っていた。そしたら一人、また一人と携帯機を持ってくるようになって、やがて――先生に見つかって、厳しい叱責を受けて没収されたっけ。

「私さ、まだ転校して間も無いから仲の良い子いないんだ」そう、寂しげに呟きを落とす楽堂さん。「そしたら余計に、砂宮くんの事が気になっちゃって」

それって……もしかして……っ？

僕はドギマギしながら唾を嚥下する。

「砂宮くんなら――私の“ゲーム”に付き合ってくれるって！」

間。

「……ゲーム？」と呟いてから、「楽堂さんと付き合うとかじゃなくて？」確認するように尋ねた。

「だって、クラスの子、みんなゲームなんてしない子ばっかりなんだもん」ぷぅ、と頬を膨らませる楽堂さん。「それに、砂宮くんは思った通り草食系だし」

……否定できなくて黙り込むしかなかった。

「だからさ、友達になってほしいんだっ。そう、ゲーム友達！」うんっ、と確認するように頷く楽堂さん。

断る理由なんて無かった。僕は快く頷く。「いいよ、僕で良かったら」

その言葉を聞いた楽堂さんは、嬉しげにはにかんだ。

◇――◇――◇

時刻は午後の六時を少し回った頃。僕は楽堂さん家からお暇する事になった。

「またウチに誘うよ。今度はＰＳＰ持って来てね」と言って玄関の前で白い息を吐き出す楽堂さん。

「うん、分かった。――あ、あと、」僕はゴソゴソとポケットを漁

る。
「ん？　何？」楽堂さんの白い息が小さく跳ねる。
ポケットから取り出したのは、チロルチョコ。「チョコ、ありがとね」
楽堂さんは微笑を浮かべながら「だから、それはお礼。今日のお礼。私一人じゃクリアできなかったもん」
僕も微笑を返して、チロルチョコをポケットに戻した。
「じゃあ、また明日」小さく手を挙げて、僕は背を向けた。
「うん、また明日」楽堂さんの手が振られたのが、背を向ける直前に見えた。
それから振り返らずに、帰途に着いた。ポケットの中身を確認するように手を突っ込むと、確かにチョコの感触があった。
取り出して、マジマジと見つめる。ミルクチョコ味。僕はその封を取って、口の中に放り込んだ。
甘い。でもちょっと融けてて、ふにゃりとした感触だった。
とても、懐かしい味がした。

――――――【完】

**（後書き）**

ヴァレンタインイヴに唐突に「時季ネタの物語」を綴りたくなって、ネタも無いまま綴った結果がこれです。３つも連載抱えながらやる事じゃなかったですね。ハハッ！

ご感想等々ありましたらお気軽に～。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9140q/

ヴァレンタインデイ

2011年2月14日12時25分発行